蝉時雨

猪名川　有意

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蝉時雨

【Ｎコード】
Ｎ５７７０Ｄ

【作者名】
猪名川　有意

【あらすじ】
カフェのマスターがまだ、藤沢梨乃だった頃。彼女は世界で一番優しい誘拐犯の渡貫時雨と出会った。これは優しい誘拐犯に藤沢梨乃が誘拐された時の話。

プロローグ　夏、昼間のカフェにて

あまり目立たない場所にある一軒のカフェ。
場所が場所なので、客はあまりいない。
だがここのココアは絶品で、一度この味を覚えてしまうと普通のココアでは物足りなくなる。
だからこの店には常連客がほとんどで私もその一人だ。
「いっらしゃい。」
ガランと音を立てドアを開けると、マスターが声をかける。
私はいつものようにマスターの前に座りココアを注文した。
マスターがココアを入れる姿をただ眺める。
どんなに観察したところで、マスターのようなココアは入れられない。
そんな事は解りきっているのだが、見ずに入られない。
コトっと目の前にココアの入ったカップが置かれる。
「お待たせしました。」
そう言うとマスターはふわりと笑った。
マスターはもう３０過ぎらしいが、そんな風には見えない。
まるで高校生のまま時が止まっているかのようだ。
でもマスターが纏っている雰囲気のようなものが、この人は大人だという事を教えてくれる。
「やっぱり、おいしいですね。」
私がそう言うとマスターは笑いながら言った。
「先代のマスターほどではありませんよ。でも、ありがとうございます。」
「先代のマスターって確か、マスターの旦那さんですよね？」
「はい。私は彼が淹れてくれるココアが大好きでした。」
そう言ってマスターは昔を思い出しているのか、懐かしそうに呟いた。

先代マスターは何年か前に事故死したそうだ。
マスターは随分長い間悲しんでいたそうだが、常連客の励ましにより元気を取り戻し新しいマスターとしてカフェを継いだらしい。
「先代はどんな方だったんですか？」
「そうですねぇ。寡黙で優しい人でした。」
マスターがそう言ってから自然と会話はなくなった。
沈黙は何故かそんなに苦痛なものではなかった。
マスターがカチャカチャと、カップを洗う音と何匹いるのか判らないほどの蝉の鳴き声だけが響いていて、逆に心地よいとさえ思った。
『・・市の少女～さんが行方不明になりました。～さんの特徴は・・』
不意に静寂に満たされていた店内にニュースのアナウンサーの声が響いた。
「行方不明ですか。もしかして誘拐されたとかですかねぇ。本当怖いですね。」
私がそう言うとマスターは手を止め、こっちを向いた。
「誘拐・・ですか。あの子は、本当に怖い目にあっているのでしょうか？」
「どうゆう事ですか？誘拐されたんだし怖いんじゃないですか？」
マスターはまたふわりと笑っていった。
「私実は昔誘拐されたことがあるんです。」
「えっ！？本当ですか？」
コクリとマスターは頷いた。
「でも、全然怖くありませんでしたよ。とっても優しい誘拐犯でしたから。」
「誘拐犯が、優しいんですか？だったら、どうしてマスターを誘拐したんですか？」
私がそう聞くと、マスターは懐かしそうに微笑んだ。
「優しいから私を誘拐したんです。そうですね・・少し長くなりますがいいですか？」

私が頷くと、マスターはゆっくりと話し始めた。

第一話　君との出会いに至るまで（前書き）

今回からマスター視点です。
以前出てきた『私』とは違います。

第一話　君との出会いに至るまで

えと、何処から話しましょうかね。
とりあえずは、出会う前の私の事からにしましょうか。
私の小さい頃、父が不倫して母は父と離婚しました。
私の親権は母に渡され、母に育てられました。
でもある時から、母は私に暴力を振るうようになったんです。
理由は仕事で溜まったストレスの発散。
当時の私は何故殴られるのか判りませんでしたが、きっと自分が悪いのだろうと思いじっと母の暴力に耐えていました。
何年か後、近所の方が私が虐待されている事に気付き、母は警察に連れて行かれました。
その後母は精神科で治療を受け私を引き取りました。
もちろん私は、怖かったですよ？
何せまた母に殴られるかと思うと怖くて怖くて足が震えたくらいなんですから。
でも母は泣きながら私に抱きついて
「ごめんね、ごめんね。」
と謝ってくれました。
やはり、どんな事をされようとも子供って親を簡単に嫌えないんですよ。
私は母を許し、また一緒に暮らし始めました。
でもまた、母は私に暴力を振るいはじめました。
今度は、誰にも気付かれないように顔などは殴らず、お腹や背中を殴りました。
今思えばきっと母はそれ以外に、ストレスの発散の仕方が判らなかったんでしょうね。
だからわざわざ隠してまで、私に暴力を振るったのでしょう。
ご飯もきちんともらえてましたし、部屋ももらえました。

まぁ部屋と言っても布団と新聞くらいしか置いてませんでしたけどね。
え？何故新聞かって？
それは社会について知っておかないと、不自然だと思われるかもしれないからですよ。
ほら、虐待されている子ってテレビとかそういうの見てないってイメージがあるでしょう？
前科ありですから、周りもそうゆうのを見てまた虐待されてないかって気にしているんですよ。
友達も、すごく気にかけてくれてました。
頻繁に遊びに行こうと誘ってくれましたし、元気がないと相談に乗ってくれました。
そういえば皆どうしてますかねぇ。
だいぶ前こっちに旅行に来ていたようで、一人には会ったんですけど・・・。
他の皆は元気でしょうか。
っとあぁ、話が逸れてしまったようですね。
すみません。まとめるの得意じゃなくって・・・。
何処まで話しましたっけ？
そうそう、部屋の話まででしたね。
そういう状態で私は高校生になりました。
受験かなり大変でしたねぇ。
一日の勉強のタイムリミットは母が帰ってくるまで。
毎日どきどきしながら勉強していましたね。
だからあんまり頭に入らなくって・・・。
学校の休み時間も勉強していましたよ。
友達には勉強熱心だと思われてたようです。
時間で言ったら大体変わらないんですけどね。
あっ、また話が逸れてしまいましたね。
本当にすみません。高校の話ですよね？

高校生になっても母は暴力を止めず、隠し続けていました。
かなり巧妙に隠していたみたいです。
だから私は誰にも気付かれず、ただじっと暴力に耐えていました。
本当、誰かに助けを求めたらよかったんですけどね。
あの時は、もう当たり前のようになっていてそんな事思いつきもしませんでした。
慣れって怖いですよね。
毎日家に帰るのが怖くて、わざと遅く帰ってました。
まぁいくら友達とはいえ、毎日つき合わすのも悪かったんで大体一人でぶらついてました。
ある日いつものように町をぶらついていると、表通りから随分と離れた場所にカフェがあったんです。
私は興味本位でそのカフェに入りました。
「いらっしゃいませ。」
そこには無愛想な感じの、男の人がカップを洗っていました。
それが、私と優しい誘拐犯渡貫時雨さんとの出会いです。

第二話　届かない願い

「いらっしゃいませ。」
顔も上げず、それだけしか言わなかったのでこの店大丈夫かな？なんて思ってました。
しかもメニューにはココアとコーヒーとサンドウィッチくらいで、私ビックリしちゃいました。
「あの、ココア一つお願いします。」
私はコーヒーが苦手だったので、ココアを頼みました。
ゆったりした動きで、でも無駄が全然なくてすごいと思いました。
本当に今でもはっきりと憶えているくらいに、私にとっては衝撃的なことでした。
その時飲んだココアの味も忘れられませんよ。
あの頃の私にはとても、優しい味に思えて知らず知らずのうちに涙があふれ出てきちゃいまして・・・。
かなり驚かれましたねぇ。
「え、と・・すみま、せん。そんなに、不味かった、ですか・・？」
「違い、ます。すごく、美味しいです。本当に、美味しいです・・っ」
「・・・何か、嫌な事でも、あったんですか？」
嫌な事、それを聞いたら不意に母のことを思い出しました。
そんな私を見ていた彼がポンと私の頭に手を置いて頭を撫でてくれました。
「自分は、口下手ですが、話を聞くことくらいは、出来ます。だから、言って下さい。あなたの、辛いこと、悲しい、こと。自分が、ちゃんと、最後まで聞きますから。」
ゆっくりと言葉を選びながら言うようにそういってくれました。
本当に口下手なんでしょうね。
言い方でなんとなく判りました。

「ありがとうございます。私は、藤沢梨乃です。」
「自分は、渡貫時雨・・です。」
私が笑うと時雨さんも優しく笑みを浮かべていました。

それから私はよく、時雨さんのいるカフェに行くようになり、カウンターでココアを飲みました。
相変わらず、母は暴力を続けていましたが私にとっては平穏な日々で、ずっとこんな日々が続くといいなと願いましたよ。
なにせ母の暴力はもう日常化していましたので、これ以上のことが無い限り私は殺されはしないとわかっていましたので・・・。
でも、平穏って長くは続かないものなんですよね。
確か、時雨さんが何か言いたそうにしながらも、結局なにも言わないということを繰り返すようになった頃です。
いつものようにココアを飲み、時雨さんと話した後家に帰るともう母が帰ってきていました。
「お母さん？今日は早いんだね。」
私がそう言うと母は振り返り、私を見ました。
「梨乃。遅かったわね。何処行ってたの？」
母は私を睨みながら言いました。
「あ、友達と、話してたら、遅くなちゃって・・。」
一応嘘ではありません。
時雨さんは友達と言ってもいいくらいでしたので。
でも母はなにを思ったのか、すくっと立ち上がりキッチンの方へ行ってしまいました。
私はよく判りませんでしたが、母がわからない行動をすることはいつものことでしたので、私は自分の部屋で宿題をしていました。
ガチャっと、いきなりドアノブがまわされ母が初めて私の部屋に入ってきました。
「お母さん？どうしっ！」

私は急に左腕に熱い感覚がして、思わず言葉を切ってしまいました。
よく見ると、私の左腕は母が手にしている包丁に刺さっていました。
その時ようやく自分は母に刺されたことを理解しました。
それと同時に、もう一つ理解しました。
私は母に殺されるのだ、と・・・

第三話　会いたい人

ズッという音がして私の左腕から包丁が抜かれました。
包丁を抜かれると、私の腕から血があふれ出てきてかなり痛かったです。
「隣の奥さんに聞いたの。」
母は、私の血がべっとりと付いた包丁を持ったままポツリと呟いたんです。
不思議に思って、私は右手で左腕の傷口を掴んだまま顔を上げました。
「アンタが、カフェのマスターに毎日のように会いに行ってるって。」
相変わらず私の腕からは、血があふれ出ていましたが、不思議とその時は気にならず母にばれたという事だけが私の頭の中にめぐっていたんです。
「私がこんなに頑張って仕事している時に、アンタは恋愛なんかして・・・。よくもそんなひどい事できるわね！？私に対してのあてつけのつもり！？アンタは、夫に捨てられて仕事が上手くいかない私を嘲笑っているんだ！アンタなんか・・殺してやる！」
私は驚きました。
母が此処まで追い詰められていた事に・・・。
母は再び包丁を私の方に向け近づいてきました。
あぁ、私は母さんに殺されるんだ。
そう思ったとき何故か時雨さんの顔が私の脳裏を掠めたんです。
すると勝手に体が動いて母を突き飛ばしていました。
母は、初めての私の反撃に驚いた様で唖然とした顔で私をみていました。
私はすぐ部屋を出て、靴をはき走って家を出たんです。
行くあては決めていませんでしたが、私の足は自然と時雨さんのカ

フェに向かっていました。
時々腕からぽたぽたと血が地面に落ちる音を聞きながら、ゆっくりと歩いて行き時雨さんのカフェに辿りつきました。
「やっぱり、そうだよね。」
カフェには明かり一つついておらず、沈黙していたんです。
あの時の私は、今が閉店時間が過ぎているというのを忘れていたんです。
時雨さんが居ないとわかると、私の体から力が抜けてしまい電柱にもたれかかってしまいました。
もう、時雨さんに会えない・・・。
たったそれだけの事が私には自分の死より怖いことのように感じられました。
「梨乃さん・・・？」
ふと、声が聞こえたので顔をあげ振り返ると、其処には時雨さんがいたんです。
「梨乃さん、こんな時間に、どうしたんですか・・？」
「あっ・・・。」
時雨さんに聞かれて、本当の事を言うべきかどうか悩みました。
私はすっと左腕を隠し、嘘をつく事に決めたんです。
「いえ、気晴らしに散歩してて近くを通っただけです。」
「そうですか・・。あの、ココアでも、どうですか・・？夏とはいえ、夜ですし・・冷えたでしょう。」
「すみません。そろそろ母が心配しますので、今日はもう帰ります。」
私は少し迷ってから、こう言ったんです。
「それでは、また明日。」
・・・明日なんてもう無い。
そんな事わかりきっていましたが、私は『明日』という言葉を使ったんです。
時雨さんに心配をかけさせたくなかったから・・。

「あの・・・り、梨乃さん！」
時雨さんはそう叫ぶと帰ろうとした私の左腕を掴みました。
「っ・・・！」
「え・・・？あっ、すみません！だ、大丈夫ですか？」
私が痛みに顔を歪めると、時雨さんはすぐに謝り手を離してくれたのですが・・・
「梨乃、さん・・？これ、は・・？」
時雨さんの手に私の血がべっとりと付いていたようで、腕の傷に気付かれてしまったんです。
「え、と・・その、さっき木に刺さってしまって・・」
「嘘をつかないでください！」
ビックリしましたよ。
なにせ、無口で口下手な時雨さんが大声を張り上げたんですもの。
驚かないほうがおかしいです。
「本当の、事を・・言ってください。お願いですから・・っ。」
その時の時雨さんは、泣きそうな顔で懇願するようにいったんです。
私は、思い切って時雨さんに全部話そうと口を開きました。

第四話　君のために

「・・そんな事が、あったんですか。」
私の傷の手当てをしながら時雨さんはそう、言いました。
「梨乃さん、警察に行きましょう。」
時雨さんはそう言ってくれましたが、私は首を横に振ったのです。
「・・どうして、ですか？」
「昔、警察に行った事があったんですが・・・」
あれは、母が戻ってきた後でした。
私は、再び始まった暴力に耐えられず警察に行ったんです。
「すみません。この子前にあんな事があったから、少し変になったみたいで・・それもこれも私がいけないんです。私が、この子に辛くあたってしまったから・・」
そう、母は泣きながら言ったんです。
おかげさまで、私は精神異常者と勘違いされて精神科に連れて行かれましたよ・・
その事を時雨さんに言うと、時雨さんは下を向いて少し考えてからこういいました。
「逃げましょう。梨乃さん。」
その時私は、驚いてただ固まっていました。
「梨乃さんには、まだ言ってなかったですが自分はもうこの店をたたんで、実家の方に帰るつもりなんです。だから、一緒に行きましょう。」
最近、なにか言いたそうな事というのはこの事だったんです。
「時雨さんを、巻き込むわけにはありません。」
私はいくらか時間が経った後、ようやくそれだけ言いました。
「そんな事、言わないでください！」
「でも！下手をすると、お母さんは時雨さんに罪を着せるかもしれないんですよ！？」

いままでの経験から、母は相当頭が良いのはよくわかっていましたので、もしかすると母が時雨さんに罪を着せるかもしれない、と思ったんです。
「いいんです。そうなっても。」
「え・・？」
時雨さんが言った言葉に、私はつい先程までの興奮が冷めて声が出せなくなりました。
「梨乃さんが、少しでも辛い環境から抜け出せるなら。」
「どう、して・・・？」
時雨さんは笑って、私にこう言ったんです。

「自分は、梨乃さんが好きですから。」

「え・・・？」
その時の私は、ただ時雨さんの言葉を聞き立ち尽くしていました。
時雨さんはそんな私を見ると、優しく笑ってくれたんです。
「自分に、梨乃さんを攫わせてくださいませんか？」
私は小さくでしたが、頷いて時雨さんの手を取りました。

これが、優しい誘拐犯と私の逃亡生活の始まりでした。

第五話　夕焼けの海

最初時雨さんが店をたたんで実家に帰る日は、一週間後でした。
ですが、時雨さんは実家に少しでも荷物を送るお金を減らすため、一回荷物の一部を自分で持
ってくると言って、次の日の朝早くから出る事を決めてくれたのです。
もしかすると、母が警察に通報して私を見つけ出そうとしているかもしれなかったので、私はバイト用の制服を着て帽子を被り少しだけでも変装して時雨さんの車に乗り込みました。
「梨乃さん。とりあえず後部座席で寝ているふりでもしていてくれますか？」
私は頷いて後部座席で横になりました。
そのまま車は発進し、私と時雨さんはずっと無言でいたんです。
何キロか進むと警察の方が検問していました。
私はそれを見て、思わず目を見開いちゃいまして．．．
あ、でもその後時雨さんが大丈夫って言ってくれて少し落ち着いたんですけどね。
その検問は飲酒運転をしていないか、というものでして．．．
あの時は本当にホッとしました。
「後ろの子は、お子さんですか？」
警官がいきなりそんな事を言ってこっちに視線を向けました。
確かに、あの時の私は高校生でしたが時雨さんは二十五歳位なのでその発言はおかしいと思い
「いえ、従妹です。」
と時雨さんは当たり障りのない返事をしてから、先に進みました。

「梨乃さん」
ずっと無言だった時雨さんが声をかけてくれたのは夕方くらいでした。
「はい。どうかしましたか？」
「外、出ませんか？ずっと同じ体勢で疲れてるでしょう？」
そう言って時雨さんは車を止めました。
外に出てみると、目の前には夕焼けに染まった海が広がっていました。
「・・・綺麗」
とても小さな声で呟いたんですが、聞こえていたようで時雨さんは微笑んでいました。
・・・その顔にちょっとときめいちゃったのは秘密ですよ？
まぁそのときの私は恥ずかしくなって顔を背けちゃいましたけど。
でもその時は本当に幸せで、時雨さんとならどんな事だってできるような気がしたんです。

現実は、そんなに甘くないって知っていたのに

第五話　夕焼けの海（後書き）

どうも、作者です。
生きてます。
すみません、早めに更新するとか言いながら・・
気づけば一年位ほったらかしにしてしまいました。
これからも出来るだけ頑張りたいと思うので読み続けていただければ嬉しいです。
では、また六話でお会いできることを祈って。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5770d/

蝉時雨

2010年10月15日19時34分発行